第四講　演習問題(4)

次の文章は大江匡房の談話を藤原実兼が筆録したものである。これを読んで、あとの問に答えよ。

語られて云はく、「村上の御時、「宮鶯暁の光に囀(さへづ)る」の題の詩に、文時三品(ふみときさんぼん)を召して講ぜしめられしに、[1]その間の物語は知らるるか、いかん」と。答へて云はく、「知らず」と。語られて云はく、「尤も興有ることなり。件(くだん)の日は村上と文時と相互に相論の日なり。[2]件の御製に云はく、「露濃やかにして緩く語る園花の底。月落ちて高く歌ふ御柳の陰」と作らしめ給ふを、文時、「西楼に月落ちて花の間の曲。中殿に灯残って竹の裏の[3]音」と作りたりければ、主上聞こしめして、「我こそ[4]この題は作り抜きしたれと思ふに、文時の詩またもつて神妙なり」と仰せられて、文時を召し、御前に近づけて、「偏頗なく我が詩の事、憚りなく難の有無を申せ」と仰せらるるに、文時申して云はく、「御製神妙に侍り。ただし、[5]下の七字は文時が詩にもまさらせたまひたり。『御柳の陰』なれば、宮と思え候ふに、上の句は、いづこに宮の心は作らしめおはするにか候ふらむ。園は宮にのみやは候ふ［ A ］」と申すに、村上の仰せらるるやうは、「足下は知らぬか。その園は我が

園ぞかし」と仰せらるるに、文時申して云はく、「しかこそ侍るなれ。上林苑(注)の心にこそ侍るなれ。しかりといへども、いかが侍るべからむ」と申すに、「尤も謂れ有り」と仰せらるるに、ひとり問答して云はく、「また興有る仰せ事あり」と云ひて、「さこそは侍りなん」と(ア)申して座を退かんとするに、主上また仰せらるるやう、「しからば、我が詩と足下の詩と勝劣はいかん。慥(たし)かに差し申すべし」と仰せらるるに、文時申して云はく、「御製は勝(まさ)らしめ給ふ。尤も神妙なり」と(イ)申すに、主上仰せらるるやう、「よもしからじ。慥かになほ申すべきなり」と仰せられて、蔵人頭を(ウ)召して仰せらるるやう、「もし文時この詩の勝劣を申さず、実に依りて申さしめずは、今より以後、文時の申す事、我に奏達すべからず」と仰せらるるを(エ)聞きて、文時申して云はく、「実には御製と文時が詩と対座に御座(おは)す」と申すに、「実に誓言を立つべし」と仰せらるるに、また申して云はく、「実には文時が詩は今一膝上りて侍り」と申して、(オ)逃げ去り了んぬ。主上感歎せしめ給ひて、啼泣し給ふ」と云々。

(『江談抄』より)

注 上林苑…長安の西にあった御苑。秦の始皇帝が創建し、漢の武帝が拡張増設し、広大な規模を有した。

問一 傍線部1「その間の物語」の指すこととして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 村上が文時との対面時に蔵人頭を呼び出したこと。
イ 村上が文時との対面の最中に退席したこと。
ウ 村上と文時との詩についての問答の様子。
エ 村上が文時に語った政治の話。
オ 文時が村上に申した政策。

問二 傍線部2「件の御製」とは何を指すか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 村上の作った和歌。
イ 文時の作った和歌。
ウ 文時の立てた誓言。
エ 村上の作った詩。
オ 文時の作った詩。

問三 傍線部3「音」とあるが、この「音」はどこから発するものか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 琵琶　イ 鶯　ウ 竹　エ 柳　オ 人

問四 傍線部４「この題は作り抜きしたれ」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア この題のものはいくつか古人の作品から書き抜いたものがある。
イ この題の作品については以前見たことがある。
ウ この題の作品は前から作り置いてあった。
エ この題の作品は今まで作らないで来た。
オ この題では抜群の作品を作った。

問五 傍線部５「下の七字」が指す語句の初めの一字と終りの一字とを記せ。

初め＝　　終り＝

問六 空欄Ａに入る最も適切な語を、次の中から一つ選べ。

ア めり　イ こそ　ウ ぞ　エ べき　オ はず

問七 傍線部ア〜オの中で、一つだけ他と主語が違うものがある。その記号を選べ。

問八　次のア～オの中に一つだけ本文の内容と合致しないものがある。その記号を選べ。

ア　村上は初め自分の作品が文時のものよりも優れていると思っていた。
イ　文時は村上の作品と自分のものとが互角の出来栄えだと考えていた。
ウ　文時は終始自分の作品が村上のものより少しは上だと思っていた。
エ　文時は村上の作品の前半が題から逸脱していると考えていた。
オ　村上は自作の中の「園」は宮廷の庭だと考えていた。

第四講

〔模範解答〕

問一　ウ
問二　エ
問三　イ
問四　オ
問五　初め…月　　終り…陰
問六　エ
問七　ウ
問八　イ

〔現代語訳〕

（大江匡房が）語られて言うことには、「村上天皇の御代、『宮鶯暁の光に囀る』という題の詩に、（天皇が）菅原文時をお呼びになって漢詩を読みあげさせなさったが、その時の話は知っておられるか、どうか」と。（私〔＝藤原実兼〕が）答えて言うことには、「知りません」と。（大江匡房が）語られて言うことには、「たいそう興味深いことである。その日は村上天皇と文時とが互いに相手の詩を論じられた日である。その時の村上天皇がお作りになった詩に言うことには、『露濃（こま）やかにして…＝明け方露がひどく降りて、鶯は宮中の庭園の花の中でゆっくりとさえずり、月が沈むと御苑の柳の陰で高やかに歌っている』とお作りになったが、文時は、『西楼に月落ちて…＝明け方に西楼に月は沈んで、鶯は花の間に歌い、中殿になお灯火が消え残る時、庭の竹の中で鳴いている』と作ったので、天皇は（これを）お聞きになって、『私こそこの題では抜群の詩を作ったと思うのに、文時の詩もまたすぐれている』とおっしゃって、文時をお呼びになり、お側に近づけて、『公平に私の詩のことを、

遠慮なく欠点があるかないかを申せ』とおっしゃるので、文時が申し上げることには、『帝の作られた詩はすぐれております。あるいは、下の七字では私、文時の詩よりもまさっていらっしゃいます。『御柳の陰』ですから、宮中と思われますが、上の句は、どこに（詩題の宮鶯の）宮という意味を（こめて）お作りになったのでしょうか。園は宮中にだけあるのでしょうか』と申し上げるので、村上天皇がおっしゃることには、『おまえは知らないのか。その園は私の園（すなわち宮中の園）だよ』とおっしゃるので、文時が申し上げるには、『そうでございましょう。上林苑の気持ちでございましょう。そうだとしても、（園は）どうでしょうか』と申し上げるので、（天皇は）『十分な根拠があるのだ』とおっしゃるので、（文時は）ひとりごとに、『また興味あるお言葉だ』と言って、『そうでございましょう』と申し上げて席を退こうとすると、天皇がまたおっしゃることには、『それならば、私の詩とおまえの詩と優劣はどうか。はっきりと申すがよい』とおっしゃるので、文時が申し上げるには、『帝の作られた詩がまさっていらっしゃいます。たいそうすぐれております』と申し上げると、天皇がおっしゃることには、『まさかそうではないだろう。もっとはっきりと申すがよい』とおっしゃって、蔵人頭をお呼びになっておっしゃることには、『もし文時がこの詩の優劣を申さず、本当のことを申させないならば、今後は、文時の申すことを、私に取り次いではならない』とおっしゃるのを聞いて、文時が申し上げることには、『本当は帝の作られた詩と文時の詩とは対等でいらっしゃいます』と申し上げると、『偽りなく神仏に誓いを立てて言うがよい』とおっしゃるので、また申し上げることには、『本当は文時の詩は（帝の作られた詩よりも）一段上にあります』と申し上げて、逃げ去ってしまった。天皇はこれに嘆き悲しみなさって、声を上げてお泣きになった」と語られたのである。